
小さな世界の大きな物語

利休

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小さな世界の大きな物語

【Nコード】

N9134U

【作者名】

利休

【あらすじ】

東の大国、ファイズランド皇国と西の大国、ジグラスカ帝国の間には戦争が起きていた。両国の間にある町や村では侵略と略取などが日常して起こり、それはついにフェイトたちの住むコルスト村へまで及んでいた。

世界は二分され、全てを奪う帝国を潰さない限り平穏は訪れない。それを知ったフェイトたちは、世界を救うための戦争へと身を投じることになる。

第一話 終わりは始まり（前書き）

どうも、利休（元号四年）です。ストーリー自体は考え付いていたものの、なかなか書く気が起きなかつた小説を書いて投稿することになりました。登場人物がかなり多いですが、飽きずに読んでもらえたら嬉しいです。一週間に一回は投稿するようにしたので、これからよろしく願います。

第一話 終わりは始まり

木々が鬱蒼と生い茂った森の中。そこを四人の男女が駆け抜けていた。

「急げリン！ 捕まったら殺されるぞ！」

「待ってフェイト！ 足がもつれて上手く走れないの！」

「このまま捕まったらまるかよ……！」

「あいつのためにもここで死ぬわけには行かないんだ……！」

彼らは怯えるように走っていた。後ろから迫り来る脅威に。そして、自分の故郷を打ち壊し、大切なものを奪い、殺していった帝国の軍から逃げるように。

だが

「見つけたぞガキ共！」

「っ！ 走れ！ 絶対に追いつかれんな！」

そう叫びながら四人のうちの一人が左へと進路を変える。

「一旦分散するぞ！ 逃げ切ったらいつもの場所まで戻って来い！」

それが無理なら近くの街まで走れ！」

「分かった！ もう一度会うまで死ぬんじゃないぞ！」

もう一人がそう返し、四人はバラバラの方向へと走っていく。彼らを追っていた軍の兵隊は一人だけだったため、確実に三人は生き残れる計算だった。

だが、その考えすら軍事力にものを言わせる帝国の前では無駄な努力だった。

「おっと、こっちは通行止めだぜ」

「なっ」

既に彼らを取り囲むように、軍の騎兵隊が数人待機していたのだ。

「まったく、手間をかけさせんじゃねえよ っと！」

「ぐあっ！」

「レイス！」

四人の男女のうち、一番背が高い少年がその近くにいた騎兵に体を両断するようにして槍で切られた。その行動を狼煙にするかのように、他の騎兵が残った仲間達を同じように斬り捨て、あるいは貫いていった。

「リン！ レイス！ ルーク！」

そして、一人の少年を除いた全員が騎兵によって、何の情けも感慨もなく殺された。

「貴様ら……！」

「おうおう、心地よい殺気を放つじゃねえか坊主」

「殺す！」

少年は家の納屋から持ち出した槍を片手に突進していく。だが、戦いのために訓練された兵士達に敵うはずもなく

「ぐふっ！」

一瞬にして腹部を槍によって貫かれた。

「恨むんなら帝国に楯突いた村の大人たちを恨むんだな」

「ま……待て……」

少年は薄れ行く意識の中でなんとか生きようとして兵士の足を掴んだ。

だが、それも最後の悪足掻きでしかなく、兵士が煩わしそうに足を後ろに向かつて軽く蹴っただけですぐに振りほどかれてしまった。

「く……そ……」

少年は遠くなっていく足音を聞きながら、胸にとてつもなく大きな復讐心を抱き、薄れ行く意識の中で目を閉じた。

その場には、鉄が錆びたような匂いが充満していった。

第一章 終わりは始まり

「大地に住まう光の精霊よ、この者達の傷を癒し、彼らに祝福を与えたまへ」

白い装束に身を包んだ神官の老人がそう唱えると、三人の男女の元に聖なる光が降り注ぎ、瞬く間に死に至るレベルの傷を癒していた。

「これで大丈夫なはずです。ルセリア様」

老人が魔導の間の隅に静かに佇んでいたドレス姿のルセリアにそう言うと、彼女はまるで聖母のような笑みをたたえた顔で、

「ありがとう、キフ。もう下がっていいですよ」

そう神官を労った。

「それにしても……この傷でよく生きていましたね」

「どうやら強力な護符があったようで……出血は激しかったです。命に別状はありません。傷も治りましたし、数刻もすれば目も覚めるでしょう」

ルセリアは眼前に横たわる三人の男女を見て、静かに溜息をついた。

彼らを見つけたのはほんの半刻前のこと。野暮用で隣の国まで出かけていたルセリアは、その帰路の途中で道に倒れていた三人を見つけ、自分の城まで運んで来たのだった。

当初はとても生きているとは思えないほどの傷を負っていたため助けるだけ無駄だと思っていたが、訪問に同行していた神官のキフがまだ生きていると言ったがための行動だった。もしもその場にキフがいなかったら、彼らの命はそこで切れていただろう。

彼らの首には全く同じデザインの護符が掛けられていて、どうやらその守護の力によって彼らは生き永らえていたらしいが、回復術や神威の力に若干疎いところのあるルセリアにはまるで理解できていなかった。

何を隠そうこのルセリア、近隣諸国の人間には聖母のような王女だと有名だが、側近の近衛兵や神官の間ではある意味帝国の人間よりも厄介だということでも有名でもある。

「姫様も一国の主なのでから、そういったことも勉強してもらわねば困ります。近いうちに帝国との戦争も始まるのですから、その

ように楽観的では」

「分かつてるわよ。フレンは相変わらず頭でつかちねえ」

ルセリアは我関せずといった様子で近衛隊長のフレンの言葉を一蹴する。これで国民の支持率は九割を超えているのだから、世の中は理不尽だとその場にいた誰もがそう思った。

「それに、戦争になつたらお兄様が何とかしてくれるわよ。私は政治分野にだけ精通していればいいんだから」

「天国の亡き陛下がお聞きになつたらさぞ御嘆きになるでしょうね」「それよりも、私に何か用があつたんじゃなくて？」

「ああ、そうでした」

フレンは全然納得していなかったが、ルセリアの側近として仕えてきて早18年。いい加減に何を言っても無駄だということは理解していたため、自分の用事を先に済ませる事にした。

もつとも、その用事というのも気軽に話せるような内容じゃなかったが、起こってしまった事は起こってしまった事で割り切ることにした。

「西のコルスト村ですが、帝国の進撃を受けて村の八割が壊滅。村の人口のおよそ九割が惨殺されたとの報告が入りました」

「……そう。やっぱり西の地区は早いわね」

そう言いながらルセリアは唇をぎゅっと結ぶ。普段から適当に過ごしているルセリアだが、自国の民が傷つけられたと知ると、それがまるで自分の家族のように考える事がある。そう言った点が国民に信頼される理由のひとつであつたりもするのだが。

「西の地区に兵を回して。出来るだけ強い兵がいいわ。第一、第三、第七部隊を出動させて。陣頭指揮はクラウス少将に任せましょう」

「分かりました」

フレンは一礼をすると、静かに魔導の間から出て行った。

その場に残つたルセリアは、静かに彼らが目覚めるのを待っていた。

あれから数刻。日が沈みかけて空に一番星が輝く時間帯に少年達は目を覚ました。

「……………ここ……………は……………?」

「気がつきましたか」

ルセリアは一番最初に気がついた少年の元に屈みこみ、ゆっくりと覗き込んだ。

その少年は薄めの青い髪に碧眼という珍しい組み合わせの風貌をしていたが、整った顔立ちのためそこまで違和感を感じない。若干覇気の足りなさそうな顔をしているが、その瞳の奥には怜悯な光が感じられる。

「突然だけど、貴方の名前は?」

「……………レイス。レイス・ファルクフェルト」

「レイスね。いい名前だわ」

ルセリアは本心からそう言った。普段から本心で喋る事はあまり無いルセリアだが、人の名前だけは素直に褒めるといふ稀有な性格をしている。もっとも、彼女の稀有な点はそこだけに止まらないが。「ねえレイス、貴方達に何があつたのか教えてくれない?」

ルセリアはレイスを優しく諭すようにそう語りかけた。もしもレイスがコルスト村の生き残りだとしたら、かなり重度のトラウマを発症しているかもしれないと言ふ配慮からだつた。

レイスは逡巡するように視線を彷徨わせていたが、ルセリアの聖母のような微笑みを見て決心したかのようにポツポツと語り出した。「村が襲われて……………帝国の奴らに……………」

「そう……………それで?」

「家族も友達もみんな殺されて……………唯一残つた親友と……………あ」

「?」

「あ……………あいつらは……………? 俺と一緒にいたはずの……………」

レイスはおどおどしながら視線を彷徨わせる。身長が高いだけに

そうしているとかかなり違和感があるが、彼が今日一日で経験した事を考えれば不自然でもないか。そうルセリアは思い至り、優しい笑みでレイスの後ろを指差す。

「彼らなら無事よ。今は眠っているけど、もう少ししたら貴方のように目が覚めるはずよ」

レイスはルセリアの指差したほうを見て、大きく安堵の溜息をついた。唯一残った自分の親友だというのなら、そう言った態度を見せて当たり前だろう。

しかし、彼の安堵の表情は少し経って不安へと変わった。

「あの……フェイト　もう一人僕の友人がいたはずなんです……」

「え？」

もう一人？　そう言いかけて、ルセリアは彼らを拾った時のキフの言葉を思い出した。

『この出血量……三人だけのものではありませんね』

となると、あそこには彼らのほかにもう一人いたということか？

「その子の特徴は？」

「え……？　あ、えっと……黒髪に黒い目……僕よりも背は少し小さめで……木で作られた槍を持っていたはず……です……」

全くもって心当たりが無い。そもそも、あの場にいたのはレイスを含めて三人だけだったはずであり、その周囲を丁度一緒にいた近衛兵数人と搜索したが、彼ら三人に他に重傷者がいた痕跡は血痕だけだった。

「もしかして……フェイトは……」

「……ええ。あの場にいたのは貴方たち三人だけだったわ」

「じゃあやっぱり……連れてかれたのか……」

「やっぱり？」

レイスの言葉に引っかけたかかってルセリアは聞き返す。

「あいつは……フェイトは生まれつき魔力の量が膨大なんです……。そこに寝てるリン　女の子の方なんですけど……。彼女がメイジなんですけど、その約四万倍の魔力を持っていて……。」「よっ、四万倍!?」

ここでクラスの話になるが、この世界に存在する人間は全て四つのクラスで分けられる。すなわち、ファイター、スカウト、メイジ、クレリックの四種類だ。

ファイターは近接戦闘を得意とするクラスで、一番近いところをあげるとルセリアの側近で近衛隊長のフレンがそれに当たる。もつとも、彼はその上位職のナイトだが。

スカウトは遊撃を得意とするクラスで、修練次第では自らの姿を消すスキル、ハイドや背後からの急襲攻撃であるバックスタブなども使えるようになる。

メイジは魔法戦闘を得意とするクラスで、基本的に修練次第での属性の魔法も使える。属性は火、水、風、土、光、闇の六種類。火属性を使う人が多く、闇属性を使う人が少ないことは周知の事実だ。

クレリックは光属性魔法による回復術を得意とするクラスで、回復術を使わせたなら全クラス中トップクラスの性能を持っている。もつとも、その上位クラスのほうが性能は高くなるが。

次は魔力の話だが、この世界　魔法世界エルドラに存在する人間は誰でも魔法が使える。ただし、その量は遺伝や体質、育ちや環境などに大きく関わってくる。近接戦闘の訓練ばかりしていれば当然魔力は少なく、筋力が強くなるといった具合だ。

一般的に、ファイターが持つ魔力の量を1としたとき、スカウトは4、メイジは10〜20、クレリックは10〜15程度だ。つまり、メイジの4万倍ということはファイターの40万〜80万倍近い数値になるということだ。それだけの魔力があれば、魔法の腕もあれば即座に世界を支配できるレベルだ。

「フレン！ ちょっと来なさい！」

「はっ。お呼びですか」

ルセリアがフレンを呼びつけると、まるで最初から部屋の外で待機していたかのようにすぐに部屋に入ってきた。

「フレン、今の話は聞いていましたね？」

「はい。そのフェイトという少年がジグラスカ帝国の手に渡ったとなれば、即座に手を打たなければなりません」

「そうですね。西の地区に向かった兵士たちに先遣隊を出しなさい。彼らに事の性急さを伝えるのです。それと、もしかしたら生き永らえてどこかに隠れている可能性もあります。搜索隊を派遣して、その子の搜索に当たらせなさい」

「了解しました」

フレンはそう言うと、足早に部屋から出て行った。

「あの……」

「ん？」

「フェイトは……無事、ですよ……？」

レイスの質問に一瞬言葉を詰まらせる。だがそれも一瞬の事で、すぐに持ち直したルセリアはレイスを安心させるように優しく微笑んだ。

「大丈夫です。彼の身柄を確保し次第こちらに連絡をいれるようになりますから」

その言葉に偽りは無い。家族や友人を失うということはルセリア自身がその辛さを知っているため、不安や悲しみなどの感情を国民に味わわせたくは無いのだ。

だが、ルセリアの頭には一つの不安要素があった。もしもフェイトがジグラスカに捕らえられていた場合、ルセリアの治める国、フアイズランド皇国には彼以上の魔力を持つ人間が存在しない事だった。

魔力が多いというのはそれだけで十分脅威になる。フアイズランド皇国では人間の人權を踏み躪るような非人道的な魔法の使用は禁

止されているため、本人の許可なしに何かをしたら例え王女だろうと極刑になる。

しかし、ジグラス力ではそう言ったことは禁止されていない。むしろ使えるものはとことん使えがジグラス力の理念でもあるため、洗脳などの非人道的な魔法を使ってただの殺戮兵器にする可能性も考えられる。それこそ、一万年以上前に起きた神々の戦争で投入されたといわれる大量殺戮破壊兵器オスガのように扱われてこの国の脅威となることも考えなければならぬ。

「貴方はここでしばらく休みなさい。何かあればすぐに連絡を入れるようにします。果報は寝て待てというものです」

「はあ……」

ルセリアは全然納得していない様子のレイスを魔導の間に残して部屋を出た。その目には一つの決断が宿っていた。

「今すぐ各界の長官、各部隊の総隊長とカイン元帥、スタン元帥に連絡を取りなさい！ 二時間後に軍事会議を始めます！」

『はい！』

まずは自分の兄であるカイン元帥から連絡を取ろう。そう決心したルセリアは、慌ただしくなり始めた城の廊下を早足で歩いていった。

「……………」

「あ、お母さん、起きたよー」

「……………」

「……………」どこだ？ そう思いながら、フェイトはゆっくりと目を開けた。

自分の目に映るのは、高い湿度によって苔の生えた天井や壁。干草の匂い。それらの情報から、自分が今農家の納屋のような場所にいるのだと判別した。

「ここは……」

たしか……帝国の騎兵に腹を貫かれて……。そこまで思い出した
フェイトは、突如走った腹部の痛みで顔を歪ませた。

布団を剥ぎ取って腹部を確認してみる。すると、そこには幾重にも
巻かれた包帯と自動回復魔法であるリジエネレイトの光が自分の
腹部を覆っていた。つまりと、この家の人間が重症になりな
がらも生き永らえていた自分をここまで連れてきて介抱してくれ
たのだろう。

フェイトはそう思い至ると、自分の腹部の傷を癒すために回復魔
法の詠唱を始めた。

「森羅万象に宿る光の精霊よ。ここに集いて我が身を癒せ」

詠唱が終わるとすぐにフェイトの体を白い光が包み込み、腹部の
傷が一瞬にして完治した。幼い頃からクレリックの上位クラス、テ
ンプラーのさらに上位のジャステイスになろうとして補助術を学ん
でいたのが意外と役に立ったと、この時はより一層感慨深く思った。
壁に体重を預けながら体を起き上がらせる。だが、出血量が割と
多いのか、ふらふらした様子で再びベッドへと戻っていった。

「やっべえ……血が足りねえ……」

腹部を刺された傷は予想以上に深かったらしい。人間の体という
のは構造上、何かで刺されたときよりその何かを体から抜かれた瞬
間が一番出血が多いらしい。自分の記憶が正しいなら騎兵に槍で刺
された後、即座に槍を抜かれていたはずだという結論に思い至り、
力なくベッドに倒れこんだ。

「俺……これからどうなるんだ……」

家族は帝国に殺された。友人も、大事に飼っていた家畜も、大事
なものも全て奪われ、壊された。

村の状態は酷いものだった。いつものようにフェイトは親友三人
レイス、リン、ルークの三人で山へ山菜を採りにいつていた。

彼らの故郷のホルスト村周辺では山菜のフキワラベというものが
名産品で、毎日の日課としてそれを採りに行っていたが、戻った時

には村は凄惨な状態だった。突如として進軍を開始したジグラスカ帝国の騎兵隊によって男の殆どはその場で惨殺、女も殆どが殺されたが、何人かは騎兵によって陵辱され、自分から舌を噛み切って死ぬ人間までいた。

その時は自分たちの中にいた唯一の女子　リンを守るために村を捨てて逃げる事を選択した。が、それも帝国の騎兵に見つかってしまった、結果として自分以外の全員が殺されてしまった。

もしも自分に帝国の人間を倒せるだけの力があれば、彼らを死なせるような事態にはならなかったのだろうか。そう考えると、フェイトは自分のふがいなさに唇を噛み締めた。

(とりあえず……ここを出よう……)

当てがあるわけじゃなかったが、このままここにおいても自分にとって有益にはならないだろう。そう考えて、フェイトはこの家の人間が回収してくれたと思われる壁に立てかけてあった自分の槍を持って納屋を出た。

と

「きゃあっ」

ドンツ、という音と共に、フェイトが納屋を出るのと同じタイミングで納屋に入ってこようとした一人の少女が軽い悲鳴を上げて後ろに倒れこんだ。

「あ、ごめん。大丈夫か？」

「あ、はい。大丈夫です」

少女はそう言いながら服についた砂を叩き落とし、特に怪我も無いことを確認すると、納屋の入り口の横に置いてあったタライを掴んでフェイトに向き直った。

その少女はなかなか可愛らしい外見をしていた。身長は150弱くらいで、自分の体に不釣り合いな大きなタライを持っている姿は何故か微笑ましく見える。歳は10歳ちよつとすぎくらいだろうか。

「ホントに大丈夫？　怪我してない？」

「あはは。自分よりも重傷の人に心配されるってなかなか出来ない

経験ですね」

そう言いながら少女は快活に笑った。見た目の年齢よりも大人びた雰囲気のある少女だ。

「そんなことよりも、どこに行こうとしてたんですか？ トイレだったら母屋の一階にありますから、そちらの方を」

「いや、ここを出ようと思ってね」

フェイトはそう言って自分の手に持った槍を見せる。すると、少女は驚いたような顔をしてフェイトに詰め寄った。

「だ、駄目ですよ！ あなた重傷人なんですよ！？ そんな状態で外に出たら、魔物に襲われてすぐにご臨終ですよ！ 自分の命を大切にしてくださいです！」

「気持ちは嬉しいけど、もう治ったから」

フェイトは自分に巻かれていた包帯を剥ぎ取って患部を少女に見せる。そこには、体組織が完全にもとの状態になった健康な体があった。

「じゃ、俺を助けてくれた人によろしく伝えといて」

そう言ってフェイトは少女に背を向けて家の門へと向かう。とりあえず、このまま生き永らえるにしてもまずは資金が無いと。

「待つてくださいです！」

だが、少女はフェイトの前に回りこんで両手を目いっぱい広げ、フェイトの進行を阻止しようとした。

「俺の身を案じてくれるのは嬉しいけど、俺をここに置いておくとこの村に災厄が降りかかるよ。なんてったって、俺は一時期『災厄の神子』って呼ばれてた時期もあるくらいだから」

「そんなことはどうでもいいのです！」

少女はフェイトの言葉を途中で遮り、涙ながらに叫んだ。

「どうして自分の命を大切にしないですか！？ あなたが死んだら悲しむ人もいるはずですよ！」

「いないよ、残念ながら」

フェイトは自虐をこめた冷静な瞳で空を眺める。

「みんな死んじゃったからな。出来れば、俺もすぐにみんなのところに行きたいよ」

「死んじゃったって……死んじゃったってなんですか！」

「そのままの意味。一日二日経てばこんな辺境の村でも、西のコルスト村が壊滅したっていう噂ぐらい入ってくるだろう？」

自分がどれだけ寝込んでいたかは分からないが、それでも短い時間ではないだろう。少なくとも一度日が落ちて昇ってはいるはず。

「俺はコルスト村の唯一の生き残り。だったら、俺に失うものなんて何一つ無いことが分かるだろう？」

「ですが……！」

「心配してくれるのは嬉しいけど、それでも俺はここにはいられない」

このままここにいっても悲しい現実をいつまでも感じ続けるだけだから。口にはしなかったが、フェイトは内心でそう思っていた。

「じゃあ」

フェイトはそう言って、今度こそ本当に家を出るべく門に向かって歩き出した。その背中からは哀愁が漂っていて、すでに世界の全てに絶望している様を感じて取れた。

だが

「止まれ」

「あ？」

フェイトの前に一人の男が立ちはだかった。

歳は30代後半くらい。整った顔立ちは、見た人十人に十人が振り返るような不思議な魅力を醸し出していたが、フェイトにはそれほど気にはならなかった。それ以上に気になるものがあったからだ。傷。まるで数多の戦場を駆け巡ってきたかのように刻まれた全身の傷は、彼が着ている鎧の上からでもはっきりと見て取れる。顔に縦に入った刃物の傷は完全に左目を潰して、そこには真っ黒な眼帯が付けられているため見た目の年齢よりも若干年上に見える。「どこに行くつもりだ？」

「どこに行こうが俺の勝手だろ？」

フェイトは意にも介さぬといった様子で男の横をすり抜けようとする。だが、男はそんなフェイトの肩を掴み、無理矢理自分のほうに向かせた。

「質問が悪かったようだな。何をしに行こうとしている？」

「……帝国を潰しに行くんだよ」

今の彼を突き動かしていたのは、自らの胸の内に秘めた強大な復讐心。自分の家族を、友人を、親友を、大事なものを奪い、壊していった帝国への復讐。ただそれだけだった。

「一人で行くつもりか？」

「悪いかよ」

「犬死にだ。折角拾った命を捨てるつもりか？」

「あんたに何が分かるって言うんだ」

フェイトは男を睨みつけ、反対の手に持った槍を男の首に突きつける。

「俺の道を邪魔するって言うなら、あんたを俺の道にして進むまでだ。俺は死んでいった仲間達の屍を超えていく。今更捨てるものなんて何もねえんだよ」

それだけ言ってフェイトは男の腕を強引に振り解き、再び歩き出す。

(まったく、この世界はお節介ばかりだ……)

そう毒づいて槍を担ぎなおす。だが、その拍子に槍が中間辺りからぼつきりと折れた。

「確かに、私にはうぬの気持ちなど分からん。だが、復讐心は何も生まないぞ」

「人の過ぎた欲望は世界を壊す。まずは復讐心の根絶より、過ぎた欲望を根絶する方が先じゃないのか？」

フェイトは折れてしまった槍を足元に放り、今度は自分から男を見据える。

「俺は帝国を潰す。邪魔するって言うならあんたは敵だ」

「その力、人々のために使ってみようとは思わんのか？」

「そう思ってた時期もあったけどな。じゃなきゃ、ジャステイスなんて目指してないし」

「ならば、私がうぬに生きる意味を与えてやるう」

男はそう言つて、自分の足元に魔法陣を呼び出す。呪文詠唱などなく、ただそこに魔力だけが集中していく。

「^{トランス}変移、ジャステイス」

男がそう口にする、男の体を光の粒子が包み込みその姿を一瞬にして変えていった。

光の奔流は収まらず、フェイトたちがいる一部分だけを光の大洪水が押し寄せ、世界は光に包まれた。

そして目を開けると、そこは先ほどまでいた殺風景な牧歌的な農家などではなく、無数の花が咲き乱れる大草原へと変わっていた。

「な……なんじゃこりゃ……」

「これがジャステイスの力だ」

フェイトは再び聞こえた男の声に振り返る。だが、そこにいたのは先ほどまでの野性味溢れる男ではなく、美青年という表現が正しく思える人間だった。

「復讐もいい。だが、人に笑顔や感動を与えるのもまた良い事だと思っぞ」

「あんたは」

「俺はカイン。カイン」
「ファイズランドだ」

その男、カインは肩にとつともなく大きな斧を担ぎながらそう言った。

それが、フェイトの物語の始まりだった。

第一話 終わりは始まり（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9134u/>

小さな世界の大きな物語

2011年7月17日03時29分発行